



障害支援の関係論的研究—専門家像の脱構築試論—

村田, 観弥

(Degree)

博士 (教育学)

(Date of Degree)

2016-03-25

(Date of Publication)

2024-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6568号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006568>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式4)

論文内容の要旨

氏名 村田 颯弥
専攻 教育・学習専攻
指導教員氏名 津田 英二

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

障害支援の関係論的研究—専門家像の脱構築試論—

論文要旨

本論は、専門性に付帯する権力について、教育の視点から検討する論文である。近代的主体としての専門家像の問題点を指摘し、新たな教育的関係のあり方を提起する。特に「障害」という事象に係る「関係性」に焦点を当て、教育における支援の専門性について論究を行う。

序章では、本論の二つの研究主題を明確にする。ひとつ目は、主客の問題を乗り越える研究法の開発である。専門家としての研究者態度の問題性を自覚するならば、研究する側とされる側という非対称な関係性から生じる権力の問題や、異他性を否定し、研究対象として隔離する暴力性などについて、その倫理的議論が必要となる。それらを踏まえ、新たな研究法を検討する。ふたつ目は、その方法をもとに、支援の専門性とは何かという問いを探究する。障害支援の専門性では、「理解」のための方法が問題となる。本論では、関係における他者との出会いから「教育」を、人と人が「支え合う」という観点から「支援」のあり方を考え、障害支援における「理解」のための新たな専門性を検討する。

第1章においては、本論の哲学的基盤となる「動的関係論」について、哲学、心理学、教育学など、各学問領域において使用される理論的共通点について提示する。さらに、本論の専門性の鍵概念となる「理解」について、語義を掘り下げ、その両義的性質を明らかにする。フロム、バルトの理論を参照し、近代科学における「意識化した人工物を解剖するネクロフィリア(死体愛好症)」としての専門家像の批判と可能性を指摘し、「理解」の意味をずらし、理性による分解整理のみならず、一瞬にして切り取られ凝固した世界を、解し、溶かし、他性を取り入れ、繋げる運動であることを示す。

第2章では、関係性を研究する方法として、関係の集積としての主体形成を解体し、他性との出会いを媒介に意味解釈を繰り返す方法を開発する。まず、ハイデガー、メルロ＝ポンティ、レヴィナスらの理論を参照し、関係論的な自己のあり方を検討する。次に、専門家倫理の問題と主体の根源性を問う試みを、フーコー、バトラー、アドルノらに依拠し提起する。最後に、

テキストと捉えた主体の解体と、他者との対話を循環的に実践する方法として、「循環型テキスト解釈法」を提案する。

第3章では、研究法の第一段階として、筆者を障害支援の専門家として形成された歴史的主体と捉え、1990年代後半～2000年代前半までの特別支援教育関係資料と筆者の記録・メモをもとに歴史的蓄積の解体を試みる。特別支援教育の文脈で使用される専門用語が、どのような制度的秩序のもとに扱われ、いかなる意味を帯びているのかを考察し、制度化する専門家像と抵抗する教師像を示す。具体的には、国から示される理想的専門家像の鋳型に流し込まれ、権力を内面化し、同化・服従する筆者と、同時に現われる反発する主体(理想的専門家像への主体形成の失敗)との間を揺れ動く葛藤・悩み・困難を開示する。さらに、当時の筆者が専門家となるために捨象した事象を検討することで、新たな専門性への手掛かりを探る。

第4章では、研究法の第二段階として、第3章で得られた筆者の主体形成要件を参考に、フィールドワークによる記録群を分析する過程を提示する。筆者の固定化する障害者像と関係の様相について明らかにする。筆者は、組織内における役割や期待への応答に影響されつつ、関係を変容させており、葛藤・周囲との軋轢、問題解決への志向、秩序維持などから、背景にある専門知識や権力を誘引している。研究協力者への意味を固定し、権力を纏い、関係が次第に硬直化する様子を示す。「目的合理的関係」「専門概念の使用」「規範/権力」の問題を3つの副題材として提示し、第5～7章へ繋げる。

第5章では、関係者間の関係変容こそを相互教育の学習過程とし、事象の対象化や互恵的關係の在り方を「主体と関係の物象化」とみなし、批判的に考察する。有用性に囚われる関係態度を乗り越えるため、存在論的な「関係性」としての無条件の肯定的他者受容である「欲待の思考」を専門家態度として検討する。主体の物象化、意味や関係の固定化は、生成と構築を繰り返す関係の運動を凝固させ、変化を退ける機能的関係になりうる。そこで、田中智志及び鯨岡峻の理論から、社会教育論における関係論的相互主体概念の止揚を試みる。

第6章では、「発達障害」概念の意味作用の探求を目的とする。日常における「発達障害」概念の広がりや切り口に、我々の生活世界において言葉がいかに使われ、関係に影響を与えているのかについて検討する。既成の科学言説への無批判な姿勢が概念使用の過剰に繋がる点、意味作用が使用者の常識世界の保護(概念使用による自己防御)となる点を指摘する。操作主体の存在と常識的世界を守る装置としての作用(翻訳・緩衝・拘束・同定・繋属)を開示する。

第7章では、専門家主体と権力の関係について論考する。現在の文部科学省が示す「合理的配慮」の概念は、従来の特例支援教育の延長線上にある。しかし、その判断は場を構築する規範に大きく影響され、常に権力と共にある。場と「合理的配慮」の関係を示し、専門性に付帯する権力の存在を明らかにするとともに、包摂と排除が同時に起こりうる可能性を提起する。まず、筆者が共同体組織の下位文化をいかに把握しているのかを示し、そのうち、他者変容に価値を置く文化が、その規格に適合する行為を求め、文化維持のための働きかける様相を権力の発動として描く。その権力に従属した結果、外部からの強制権力に反発してははずの筆者は、

文化に適合するふさわしい主体として内部から形成され、秩序維持行為を正当化するための虚像を構築し、排除も厭わない権力を要請する。

第8章では、総合考察として、「専門性の権力」の脱構築を行う。現在構築され、自らもその一端を担う世界に対して、批判的態度を示すためには「痛み」は不可避であり、そのような他性を受容しつつ、わかろうと反復し続ける「わからない」態度こそ、支援の専門家としての主体形成過程には重要である。しかし一方で、関係網の中で役割を担い、「決定」し、主体保持や秩序維持へ作用する両儀性を認めなければならない。そこで、障害を実体化して問題とするのではなく、障害という言葉に関わる人々の主体としての現れ方を問題とし、ものやひととの関係に生じる「歪み」こそが「障害」であるとする「関係論的障害観」を提起する。本質化した障害観を崩すことで、関係の問題として自らに引き受けることはもとより、恒常的な解体と生成が同時に行われる、流動的可変的な世界観の価値に気づく可能性を示す。

次に、支援/被支援の硬直した関係性を乗り越え、児童生徒や利用者と専門家が共に育つための、緩やかな秩序のある「場」の構築を提案する。他者に無限に晒されるのではなく、選択し判断し応答することで倫理的責任が生じる。身を開くことのできる空間において、時折葛藤や軋轢に向き合い、自己の変化を試みる契機が訪れる瞬間がある。その領域を守るための緩やかな秩序の構築を目指す。その「場」の設営と維持こそが専門家の役割となる。そこでは、目的的な効率化を求める分業ではなく、柔軟に対応する役割分担がある。役割は恒常化されず、変更可能であり、緩やかに繋がる関係となる。試行錯誤や失敗は許容され、問題は共有される。葛藤は新しいものを生む可能性として承認される。主体同士の支援する-されるではなく、「場」の空間的支援の可能性を示す。

論文審査の結果の要旨

氏名	村田 観弥		
論文題目	障害支援の関係論的研究 —専門家像の脱構築試論—		
判定	合格・不合格		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	教授	津田 英二
	副査	教授	森岡 正芳
	副査	准教授	橋本 直人
	副査	教授	伊藤 篤
	副査	教授	松岡 広路
要 旨			
<p>この論文は、多領域にわたって有用性が提示されている障害支援の専門性を切り口として、専門家がどのように世界を把握しているか、「支援」を専門とするとはどういうことなのか、専門家のもつ権力性をどう扱うかといった問題を考究することで、諸問題を乗り越えるための専門性の持つ意味の脱構築を図り、新たな専門家像の提起を試みようとするものである。</p> <p>論文は8章により構成される。第1章では、論文全体を通底する哲学的基盤となる「動的関係論」について、各学問領域において用いられる理論的共通点を提示した上で、「理解」の両義的性格を明らかにした。第2章では、関係性を研究する方法として、他者との出会いを媒介に意味解釈を繰り返す「循環型テキスト解釈法」を提示した。第3章では、著者自身を障害支援の専門家として形成された歴史的主体として捉え、その主体形成要件を描き出すことにより権力性を帯びる専門家像に対抗する教師像を示した。第4章では、本論文で取り上げるフィールドワークによる記録群を分析する過程を提示し、「目的合理的関係」「専門概念の使用」「規範／権力」の問題をサブテーマとして提示した。第5章では、関係者間の関係変容を相互教育の学習過程と捉え、有用性に囚われる関係態度を</p>			

乗り越えるため、存在論的な「関係性」としての無条件の肯定的他者受容「歓待の思考」を専門家態度の可能性として検討した。第6章では、障害概念の意味作用を探究し、専門用語が生活世界で用いられることがいかに関係に影響を与えているのかということを検討した。第7章では、合理的配慮概念の検討を題材として、専門家の権力が包摂と排除を同時に引き起こす可能性について検討した。第8章では、論文全体の総合考察として、専門家の権力性の脱構築を試み、「関係論的障害観」「決定しない専門家像」「緩やかな秩序のある葛藤空間」の構築と維持を提起した。

なお、本研究の過程で、次のレフェリー付き論文の発表が行われた。

- ① 村田観弥「実践者にとっての現象学的研究法とは何か：対人支援における「理解」のための研究者態度と方法論の検討」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第7巻第1号、2013年、pp.117-134
- ② 村田観弥「相互教育における主体形成の関係論的再考：発達支援記録の実践分析研究として」『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』第7号、2014年、pp.59-79
- ③ 村田観弥「関係に着目した「発達障害」概念の様相」『質的心理学研究』第15号、2016年（印刷中）
- ④ 村田観弥、近藤龍彰、張主善、盛敏、柴川弘子、金鐘敏、赤木和重、津田英二「学生間の相互性に着目したインクルーシブ教育のケーススタディ：韓国ナザレ大学におけるドウミ制度及び寄宿舎共同生活」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第9巻1号、2015年、pp.29-43

以上、レフェリー付き論文は、学会論文2本と研究科紀要論文（共著1本を含む）2本の計4本である。

本研究は、以上の作業を通して、障害支援の実相と新しい専門家像の提示について、次の諸点について重要な知見を得た。

第一に、障害支援に携わる専門家の省察過程をていねいに吟味し、その過程で検討すべき多様な問題をあぶり出している点である。第二に、専門家の権力性について徹底した説明を試みることで、その権力性の脱構築の意味するところを明らかにしている点である。第三に、緩やかな秩序のある葛藤空間において、目的合理的な有用性を超える「歓待の思考」を有するといった、新しい専門家像として提示している点である。第四に、障害支援の実相を言語化する作業を通して、逆に言語化できないものの存在や意味について、問題提起をしている点である。

これらの成果を価値ある集積であると認める。よって、学位申請者の村田観弥は、博士（教育学）の学位を得る資格があると認める。